

24

濟生学舎を創設した長谷川泰の思想的系譜

——鵜殿春風の果たした役割——

殿崎 正明, 山本 鼎

日本医科大学 医史学研究会

長谷川泰（以下泰と略す）は、明治初期、外国との交流が活発になるにつれ、コレラ、赤痢、チフス等の急性伝染病が流行し、西洋医の早期育成が近代国家出発における明治政府の使命となり、開業西洋医養成のために日本で最古の私立医学校である濟生学舎を明治9（1876）年4月7日、本郷元町1丁目66番地に創立し、明治期の国民医療を支える多くの医師を輩出させた。

泰は、天保13（1842）年8月、越後国長岡藩領福井村で、2男1女の長男として生まれる。祖先は、織田信長の家臣長谷川丹波守の一族で慶長19（1614）年11月の「大阪冬の陣」で越後落ちした初代長谷川利右衛門で、福井村開発肝煎・新田開墾の大功労者となり、第10代父長谷川宗濟が医業に転じ、第11代が泰である。14歳で良寛と交流のあった鈴木文台の漢学塾「長善館」で漢学を2年間学ぶ。

その後父宗濟に漢方医学を学んだ後、鵜殿春風に蘭学、英学、数学等を学び、文久2（1862）年春20歳、西洋医学・蘭学を学ぶために下総国の佐倉順天堂に入塾し、第二代順天堂主佐藤尚中に4年間学び、その後江戸で佐倉順天堂創始者佐藤泰然の次男松本良順が頭取をしている幕府医学所で学んだ後、長岡藩家老河井継之助により藩医に抜擢され北越戊辰戦争に従軍し、河井継之助の戦傷を手当てした。明治維新後、東京大学の前身にあたる医学校・大学東校・第一大学区医学校等の教員に任命され、第一大学区医学校では校長に就任した。明治7（1874）年長崎医学校校長に左遷され、間もなく同校廃校と共に罷免され、濟生学舎を創設する。

泰は、良寛のあわれみの心を踏まえた思いやりの心を持った人材の育成、人の為に尽す、困る人を救う、世の中に役に立つ人を育成する濟世救民、学ぶことは修養につとめ実践に生かすという精神を鈴木文台の長善館で学び受け継いでいたので、佐倉順天堂で佐藤尚中と出会い、濟恤（さいじゅつ、あわれみ）の心をはじめ、濟世救民、「自分のためにではなく、他人のために生きる」というフーフェランドの医戒を受容し実践する事が出来たと考えられるが、その思想的背景に大きな影響を与えた人物として今回は特に鵜殿春風の果たした役割について検討する。

鵜殿春風は今泉鐸次郎著『鵜殿春風』（大正元年）によると、天保2（1831）年1月長岡藩世臣鵜殿長義（150石、物頭）の子として生まれ、名は長養ながやす、幼名幸八、通称団次郎、春風は号である。明治元年12月9日没、享年37歳。安政2（1855）年24歳で江戸に行き、長州の蘭学者青木周弼の門人で、緒方洪庵、伊東玄朴に習った東條英庵と、高島秀帆、長州藩医となっていた坪井信道に学び、佐倉藩に仕えた後、江戸本郷元町で私塾又新堂を開き、西周、神田孝平を教え、維新後開成学校教授となった元長州藩士手塚律蔵に蘭学・英学を習う。その学は実学・経世を旨とし、長岡の友人としては小林虎三郎、河井継之助、川島億次郎、楨眞一、江戸では勝海舟、加藤弘之、榎本武揚、大鳥圭介、西郷隆盛、黒田了介、木戸孝允等がいた。鵜殿春風は安政4（1857）年に一時長岡に帰藩した後、安政6（1859）年12月に福井の大野藩から招聘され、藩船大野丸に乗り込み航海術の実践をしている。唐沢信安先生の『濟生学舎と長谷川泰』の年表に、泰は「安政6（1859）年帰郷し、父宗濟に漢方医学を学ぶ。万延元（1860）年頃、鵜殿春風に就き、初歩の蘭学、英学、数学、天文学を学ぶ。」とあるが、長善館の入塾は安政3（1856）年なので帰郷は安政5（1858）年となり、鵜殿春風に学んだのは安政6年から文久元（1861）年の間と考えられる。その縁により西洋医学を学ぶために佐倉順天堂へ行く切っ掛けとなり、後日慶應2・3（1866・1867）年、泰は江戸薩摩藩英学塾・医学所で学ぶと同時に、勝海舟の推挙で幕府目付役となっていた鵜殿春風が乞われて寄寓していた江戸駿河台の旗本川勝氏邸で蘭学を教える際に、その従者の門人として同室して川勝輝之助（丹波守、維新時若年寄）と共に改めて蘭学を習っており、その実力を究めていったものと考えられる。